

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 町 岳

論 文 題 目

グループ学習における授業実践型相互教授の介入効果

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	中谷素之
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	平石賢二
名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授	清河幸子

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

小学校の授業場面における効果的な指導のひとつとして、児童どうしのグループでの学びあいの活動がある。グループ学習は主体的な思考や理解を促す教授法であるが、一方で単なる表面的な話し合いや浅い理解に留まり、より深い興味や理解につながらない場合もある。グループ学習を効果的に運営するためには、教師がグループでの学習活動を適切に準備し構成することが必要であり、そのための教授学習過程に焦点を当てた教育心理学的研究は重要である。

本論文では、Palinscar らによって実験的に開発された相互教授法 (Reciprocal Teaching) の理論に基づいて、1. 児童の個人特性を考慮し、さらに2. 複数の教科で実施可能な枠組みでとらえ直す、授業実践型相互教授を提起し、その効果を検証するものである。

第1章では、Palinscar らによって開発された相互教授法 (Reciprocal Teaching) に関するこれまでの理論や研究を概観し、問題の所在を明らかにした上で、本論文の目的を提示している。第1節では、「協同学習」という用語および概念についての整理を行い、協同学習の効果について、学業達成・社会性の育成という2つの面から先行研究を概観した。次に協同学習場面における相互作用の質を規定する要因として、協同学習への参加意欲、学習課題・学力差、グループ成員の個人特性、地位特性等に言及した。第2節では、相互作用を促進する教師の教授方略として、話し合いの構造化やグループ学習のふり返りとその改善手続き等の先行研究をふまえた上で、その中から特に相互教授法(RT)に注目し、RTに関する研究の動向(例えば Fung, Wilkinson, & Moore, 2003)と課題について整理した。第3節では、授業実践型相互教授(RTC)の基本的枠組みと、児童の社会的特性との関連について整理した。第4節では、これらをふまえ、本研究の目的を述べた。

第2章では、小学校5年生の算数グループ学習における授業実践型相互教授による介入の、学習面への効果について検討した。研究 1-1.2.3 では、学習課題達成度・グループ学習への肯定的認知・グループ内発話内容に焦点を当て、量的に分析・検討した。相互教授法による教示を行った介入群と、自由に話し合いをさせた対照群を比較したところ、介入群では学習に関連する深い発話が多く非学習関連発話が少なかったことや、学習課題の達成度が高く、グループ学習への関与・理解に対する認知が向上するといった、相互教授法の介入効果が示された。次に児童を向社会的目標の高・低により H 群・L 群に分割し、交互作用効果について検討した。その結果、介入群において、L 群児童の非学習関連発話が抑制され、グループ学習への関与・理解に対する認知の向上が確認された一方、H 群児童においても、学習に関連する深い発話が促されるなど、より能動的な関与を促進する可能性が示された。研究 1-4.5 では、RTC の介入効果を、話し合いの文脈といった発話プロセスの質的側面により積極的に焦点を当て検討した。各グループの発話プロセスの推移からは、介入群では「学習の進行」から「思考深化」に向かうプロセスの割合が多かったのに対し、対照群では「ルール逸脱」に向かう割合が多かった。上記の結果を踏まえ、介入群・対照群の相互作用の質を象徴的に表す発話事例を抽出し、RTC の介入効果および、向社会的目標との交互作用効果について、事例解釈的分析を行った。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

第 3 章では、協同学習場面における児童の援助提供行動に注目し、RTC に援助提供行動を促進する教示を加えた RTC(援助提供行動促進型)の介入効果を検討した。研究 2 では、小学校 5 年生の算数グループ学習における RTC の短期的介入効果(3 時間)を、学習課題達成度・グループ学習への肯定的認知・援助提供行動・援助提供行動に対する自己効力感により、量的に分析した。RTC による教示を行った介入群と、自由に話し合いをさせた対照群を比較したところ、介入群では全指標について介入効果が見られた。研究 3 では、研究 2 と同一学年・単元において、RTC を長期的(1 単元=約 1 カ月)実施した効果を検討した。その結果、研究 2 と同様の結果に加え、特に教示を与えない、介入後のグループ学習場面においても、援助提供行動が般化して見られた。

第 4 章では、協同学習に対して肯定的・否定的な認識を示す児童の特徴を対比し、協同学習場面における相互作用の質を規定する要因の 1 つと考えられる、グループ成員の個人特性について、事例解釈的な検討を行った。また協同学習に対して否定的な認識を示す A 児に注目し、情意的側面の援助提供行動を促進する教示を加えた相互教授方略の介入効果を検討した。研究 4 では、「協同学習認識尺度」を作成し、協同学習に対して肯定的・否定的な児童を抽出した。そして担任への半構造化面接を行い、その児童に対する担任の発話記録をグラウンデッド・セオリー・アプローチにより分析し、概念・カテゴリーの生成・統合を行った。その結果、協同学習に対して否定的な認識をもつ児童が、グループ内の学力差に不満をもち、個の学びや友達と競争することを好むことや、非主張的な関わりを好み、自己中心的で友達と関わり合うスキルや規範意識が低いという特徴をもつことが示された。研究 5 では、協同学習に否定的な A 児に焦点を当て、小学校 5 年生の国語科「詩を味わおう」の授業において、RTC の介入効果を検討し、詩の解釈に広がりや深まりが見られるという学習効果が確認された。発話プロセスの分析から、A 児に対するグループの友達の、「アドバイスする」という認知面の援助提供行動だけでなく、なかなか発言できない A 児の発言を「(何も言わずに温かく)待つ」という情緒面の援助提供行動が、A 児の学習への参加を促し、学習効果に結び付いた可能性が指摘された。

第 5 章では、これまでの内容を総括し、成果と課題について議論した。本研究では、算数科グループ学習における RTC 介入効果を、児童の社会的特性(向社会的目標・社会的効力感)との関連から検討した。その結果、児童の社会的特性によって RTC 介入効果が異なることや、RTC にアレンジを加えることにより、それぞれの社会的特性に合った効果が得られることが示された。また、RTC の長期的介入により援助提供行動が他の学習場面に般化する可能性が示された。

以上の各研究の結果から、本研究で提起された授業実践型相互教授 (RTC) が、国語科以外の授業においても有用な方法であり、なおかつ児童の社会的特性を考慮したより精緻で具体的な相互作用プロセスを促すものであることが示されたといえる。

別紙 1 - 2

論文審査の結果の要旨

本論文に対して、審査委員からは以下のような問題点や課題についての指摘がなされた。

1. 教育心理学的に興味深い内容であるが、授業実践型相互教授による介入という本研究の主題は、学習での理解にあるのか、それとも社会性の向上にあるのか。両方を視野に入れるとはいえ、研究の主題は学習での理解や動機づけの促進にあると考えるほうが妥当ではないか。
2. 複数の介入を行い、そのなかで向社会的目標と介入効果の交互作用を検討する際に、対象となった児童を、目標の高低や介入の有無などの要因計画の単位で検討することは必要だが、授業によって個人がどのように推移したのかについて縦断的、個別事例的に検討することも重要ではないか。
3. 役割付与と話し合いの構造化という授業実践型相互教授の基本的枠組みは、児童ひとりひとりの認知過程にどのような効果をもたらすと考えられるか。ひとつの質問を起点に、その解答や確認をすることが、思考や理解の深化の上でどのように影響するのか。
4. 教育心理学や学習心理学での理論的背景はもちろん重要だが、社会的手抜きや社会的促進といった、グループ活動にかかわる心理学的諸研究からも、本論文の内容については示唆が得られるのではないか。

これらの疑問や問題点に関して、学位申請者は十分に理解しており、適切な回答と説明がなされた。また本論文の課題を踏まえ、研究の手法や分析の視点でより改善を加えた今後の研究の展開についても論じられていた。

本論文で提起された授業実践型相互教授は、教育心理学領域におけるピア・ラーニング研究に有益な知見を与えるものであり、さらに教育実践においても効果をもつ指導の枠組みを示唆するものであることから、高く評価できるものと考えられた。

以上、論文の内容および口述試験の結果を総合的に判断し、審査委員は全員一致して、本論文を、博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。